

氏名	宮木 菜月
ヨミガナ	ミヤキ ナツキ
学位の種類	博士（文化財）
学位記番号	博美第585号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 唐招提寺伝薬師如来立像模刻制作を通した木取りと台座構造に関する研究 〈作品〉 唐招提寺伝薬師如来立像模刻制作 〈演奏〉

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	藪内 佐斗司
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	松田 誠一郎
（作品第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	深井 隆
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	森 淳一
（副査）	東京藝術大学	特任准教授	（）	山田 修
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	
（副査）			（）	

（論文内容の要旨）

本研究対象の唐招提寺伝薬師如来立像（以下、薬師像）は、頭頂から台座までをカヤの一木から彫出する、奈良時代末期の作とされる像である。同寺には他に、同様の木取り・構造をもつ伝獅子吼（ししく）菩薩立像（以下、獅子吼像）、伝衆宝王（しゅうほうおう）菩薩立像（以下、衆宝王像）といった木彫像が伝わる。乾漆や塑造といったモデリング技法が中心であった当代にこのような一木彫が出現した背景には、鑑真来朝に伴う大陸の技術・造形の影響が指摘されている。通史的にみたその意義は多くの先学に認められる一方、具体的な制作方法や制作背景は未だ明らかになっていない。本論は、木取りと台座構造に着目し、薬師像の模刻制作および3像の3Dデータによる比較検証をふまえながら、薬師像の造像技法と制作背景に論及するものである。

第1章では、薬師像に関する先行研究をまとめ、本研究に際して実施された薬師像の3D計測を含めた調査報告を行い、本研究の基本情報とする。

次に第2章では、模刻制作をふまえ、薬師像の木取りの意図について考察する。薬師像には、木芯を後方に外した半割材が用いられている。模刻像の経過観察の結果、水分を多く含んだ生木の状態の材を用いて彫刻作業が行われたことが推察された。さらに、3Dデータ上で薬師像の左前膊の別材部分を取り除いた頭体幹部の側面輪郭線を抽出し、獅子吼像・衆宝王像のものと比較すると、形状・比率ともに近似する箇所が多くみられた。

薬師像の木取りは、複数の像を造立する際に、像のおおまかなプロポーション・輪郭線を共有するために有効であったことが考えられる。また半割材の木裏を像の背面にすることで、重量のある生木を用いて彫刻する際、材を横にしたまま作業を行いやすい。さらに特筆すべきは、3像ともに像の最奥である背と蓮肉後端が垂直線上に位置することである。つまり薬師像・獅子吼像・衆宝王像の制作における半割材の使用は、干割れを軽減するためというよりも、むしろ材を横にした状態で彫り進めるという、制作上の利便性をふまえた上での選択であるといえる。加えて、正面を木表に向けることにより、前膊

に大きく材を矧ぐ必要性が生じるが、木取りの際に用いられた側面輪郭線は、そもそも頭体幹部のみが示されたものであった可能性が高い。そしてこの工法が、乾漆や塑造といったモデリング技法とは異なる、カービング技法に精通した制作態度を窺わせる点に言及する。

続く第3章では、本体と同材から長い心棒を彫出する、薬師像の長大な台座構造に着目する。その構造は、等身像の制作にもかかわらず、高い足場が必要となるなど、彫刻作業において足枷となる場合が多い。模刻制作を通して、台座構造の意図と制作工程を検証したところ、制作初期の粗取りの段階ですでに心棒が彫出されていた可能性が高いという推論が得られた。また、薬師像の像身と台座部分の高さの比率は、奈良時代の乾漆像のものと近似することが想定された。

最後に第4章では、木取りと台座構造の考察をふまえ、大陸の石彫像などとの比較を通し、薬師像の系譜を考察する。唐代の石彫像では、抑揚のある正面の造形に比べ、背面が平板な作例は珍しくない。また、中国において多く開鑿（かいさく）された石窟においては、岩盤から像正面を彫出するため、背面の造形はもとより考慮されない。横にして彫り進める際に有用な木取りや、薬師像の角ばった造形に応じた衣文線が不自然に折れ曲がる点などは、制作者にとって背面の造形が重要視されず、正面から彫出していく工法が背景にあると推測した。また、同時代の作例にはみられない薬師像の台座構造は、大陸の石彫像に目を転じれば、通有の構造であったことが明らかである。しかしながら、蓮弁を挿す、糸巻き型の束を彫出する、心棒下端に溝を切るといった構造は、石彫の作例にはみられず、むしろ木という素材の中でこそ実現されうるものといえる。このことから、構造の類例は大陸の石彫に求められながら、その細部のつくりは、木材の性質を十分に生かしたものであると考えた。

以上をふまえ、薬師像の制作方法は、重たい材を用いたカービング作業に手慣れた制作者を想起させるものであり、さらには群像制作における優れた計画性を示すものであると結論づけた。しかしながら、側面輪郭線や木裏面の活用は、制作に携わった者のみが知り得ることであり、台座構造は別製の台座に組み込まれれば鑑賞者からは見えない箇所となる。そのため、薬師像は奈良時代末期に制作された先駆的な木彫像として、用材の選択、造形などは継承されたものの、その合理的な工法や構造は継承されなかった。ここに、薬師像の通史的な意義と特異性を再確認するのである。

（論文審査結果の要旨）

奈良時代後期から平安時代初期にかけての針葉樹材製木彫像の興隆に関しては、鈴木喜博氏の「栢木檀像論」以後、唐からもたらされた檀像彫刻の影響を強くみる見方が有力となっている。唐招提寺に伝わる伝薬師如来像、伝衆宝王菩薩像、伝獅子吼菩薩像をはじめとする奈良時代後期の木彫像は、唐風を強く受けたその最初期の遺品と位置づけられる重要な作品群である。

宮木氏の博士論文は、そのうちの伝薬師如来像の模刻制作を通して、その独特な木取り法のもつ意味を再検討し、奈良時代造像時の制作工程を復原することにより、その技法的な系譜を解明しようとした試論である。

近年の美術史研究では、前記した唐招提寺3像を嚆矢とする日本古代の針葉樹材製木彫像は、唐代の檀像（ビャクダンやその代用材を用いた素地仕上げの小像）の強い影響のもとに成立したとみる説が定説化している。本像がカヤを用いることや、独特な木取り法—本体と台座蓮肉部、及びその下の心棒まで半裁した丸太の木表側を正面に向けて使用し、内割を施さずにほぼ全容を一材より彫成する—を採用することについても、こうした文脈から理解されてきた。

これに対し、著者は、今回の摸造制作の経験より、次の諸点に疑問を呈した。

①像高160cmの本像に共木彫出の台座が心棒を含めて60cmもあることは、長大な材料を必要とする点で非効率的であるだけでなく、制作する上でも足場を必要とし不便であること

②木裏側を正面に向けて木取りした方が、別材矧ぎとする左前腕にかかる袖口まで共木彫成することができ、干割れの被害も最小限におさえられ、かつ平板な木裏面に正面図の下描きをすることが可能で、制作上の利便性が高いと思われること

これらの疑問を出発点として、著者は3D計測データに基づく立体造形の特徴などを根拠として、本像

の制作工程について次のような推論を展開する。

①本像は用材の中心をとる基準線を境に非常に高い精度で左右対称の造形に作られ、また上面からみると、頭頂部の肉髻、台座の蓮肉部・莖軸・束・心棒が正円に近い造形を示し、かつ台座の各部は正確な同心円に配置されている。その結果、本像の重量バランスはきわめて良好で、台座の心棒だけで安定的に立たせることができる。

②工学的とも言えるこの正確な工作を実現するためには、制作工程のなかで長い時間にわたって基準となる水平面が確保される必要があり、平板な木裏面を底面として、像を寝かせた状態で制作されたことが考えられる。

③3D画像で確認される像左側面の平板な面は、木取りの段階で半裁の丸太を切断して平らな面を作ったことを示しており、そこに左側面の下図が描かれたと考えられる。左前腕にかかる袖口を別材矧ぎとすることも、側面からみた像身のアウトラインを把握しやすくする効果があり、そのための工夫と考えることができる。

④本像の左右側面から背面にかけての造形に不自然さが看取されることも、上記の制作工程を想定すると整合的に理解できる。

⑤像を寝かせた状態で制作を行う工程は石彫の制作工程と共通しており、本像の制作に石彫の技術を有する技術者が関与した可能性が考えられる。

⑥3D計測の結果、伝衆宝王菩薩像、伝獅子吼菩薩像も本像と酷似した造形的特徴を示すことが確認され、唐招提寺創建期の木彫像の制作に、唐から渡来した石彫の技術系譜を有する工人が関与した可能性が指摘できる。

本論文は、唐招提寺創建期の木彫像について、かつて松原三郎氏が彫刻様式論に基づいて提唱した唐代石彫像との関連性を、文化財保存学の方法論によってあらためて指摘したものといえる。檀像彫刻との関係性を含めてなお検討すべき課題を残すが、唐招提寺創建期木彫像の研究に新知見を提供し、これに続く奈良時代後半から平安時代初期にかけての木彫像の研究にあらたな展望をひらく、きわめて優れた研究であると評価される。

(作品審査結果の要旨)

宮木菜月さんは、奈良時代末期の作とされる唐招提寺伝薬師如来立像（以後、薬師像）の模刻を行なった。本像は同寺にある、伝獅子吼菩薩立像、伝衆宝王菩薩立像とほぼ同様の構造を持つ像である。模刻に先立ち3D計測、写真撮影、熟覧調査を念入りにした。特に、2017年春に大阪市立美術館で開催された「木×仏像」展に本像が出品された際の搬入搬出時に、像が台座から抜かれた状態になった機会を捉え、本像の特徴である長い心棒を実際に調査させていただけたことは、後の研究に大いに役に立ったようである。

薬師像は、半割材のカヤの一木でできているが、宮木さんの計量では当初400kgを超える重量であったという。足下は60cmもあり、心棒の部分は直径14cmしかなく、立てて彫り進めるのは困難ではないかと推察した。この3像の側面輪郭を3Dデータで比較すると形状、比率は近似することから、共有する図面を使い、半割材の中央部つまり木裏を下に寝かせた状態で制作したと考えた。このことで安定した状態で制作出来ることになる。実際、背面の造形はあまり重視されず、側面からの繋がりも弱いことを指摘した。先行研究では、唐の石仏に形状が類似することから、唐工の影響が言われている。表面から彫り進める工法は、石彫のそれであると指摘する。一方、心棒の長さはむしろ、奈良時代の乾漆像のものに近似していること、心棒下端の溝を切り出し、立てた際の安定を考えた構造は、木彫に精通する人の作と分析し、唐工の影響のみでないことに言及している。これらの指摘、推察は、実際の模刻制作をすることによって理解できることである。

再現された薬師像は、両手、螺髪が見事に復元されている。台座も同時代の像を参照し、全体のバランスが見事に調和したものになった。また博士展の展示の際には、制作工程を示す模型を出品したことで、手順をより明快に解説することができていた。

模刻像は、表面的な的確さだけでなく、本像の量感に富んだ優れた彫刻性も見事に再現したことも高く評価したい。

(総合審査結果の要旨)

天平時代最末期の鑑真来朝後まもなく造られた唐招提寺の伝薬師如来立像とそれに類似した伝獅子吼菩薩立像および伝衆宝王菩薩立像の三像は、それ以前と以後に類例を見ない独特の造形と構造を持っていることで知られてきた。文化財保存学修士課程において一木造の京都府金剛心院如来立像(8~9世紀)を模刻研究した宮木菜月は、博士課程において同像に先んじるこの伝薬師如来立像(以後本像)を研究対象に選び、鑑真周辺の仏師と彼らによる造仏の背景を研究した。

巨大なカヤノキの半割一材から彫り出された本像は、大きな量塊感と硬い衣文表現とともに、本体と共木で彫り出された蓮台下の円柱状の不可解な突起を持つことが特徴とされ、これらは他の二像とも共通している。宮木は、この特異な台座構造に加え、背面が同一平面上に収まる平板な造形を持っていることや、両側面に見られる衣襷が背面に不自然に回り込んでいる形状などが、隋から唐時代の石彫像と共通することに着目した。そしてこれらが、四角い石材の背面を下にして正面から彫り進めていく石彫技法に共通するのではないかと考えた。三像が、木裏を正面にする同時代の他の像と違い、半割材の木表を正面にしていることも、背面を下にして寝かせて彫った可能性を補強している。また蓮台下の円柱状の突起を返り花に穿った穴に落とし込む方法も、石彫像と共通する構造であることを指摘し、これら三像が、鑑真とともに来朝した仏師の手になる可能性を示し、彼らが木彫技法のみならず石彫技法にも習熟していたのではないかとする論理を展開している。

7~9世紀の中国の造仏活動が、わが国の仏像制作に大きな影響を及ぼしたことは明白であるが、中国本土において木彫像の伝世品が少ないために、個別例の比較検証が難しいとされてきた。しかし宮木が、同時代の石彫像との類似点を視点に加え、しかも実際に復元制作することでその可能性を確かなものにしたことは、後学が新しい知見を拓ける可能性を示唆したといえる。

論文と併行して制作した本像の復元模刻制作においては、蓮台下の円柱状の突起物のために、立てて制作することが困難を極め、寝かせて彫った可能性を実証したといえる。そして現状面部の欠失箇所を彫り出し、螺髪を植え、両手先や蓮台の蓮弁を復元し、框座も制作することで、本像造立当初の像容を見事に再現している。論文、作品ともに大変優れた業績に到達し、標記の評価に値すると認められる。

また、2017年12月15日に行った日本彫刻史全般の口頭試問において、博士学位授与に十分な知識と要件を備えていると判断した。